

本資料は(一財)社会変革推進財団との業務委託契約に基づき、SIMIの責任において制作されました。原著の著作権は当該資料を作成した作者にあり、日本語化された資料の著作権は(一財)社会変革推進財団及び(一財)社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブにあります。

(<https://simi.or.jp/grc/impact-ratings-quantified-not-monetised-a-summary-of-discussions-with-the-imps-practitioner-community/>)

インパクト・レーティング

IMP実践者コミュニティの議論のまとめより

Impact Ratings - Quantified not monetised - A summary of discussions with the IMP's Practitioner Community

Impact Management Project

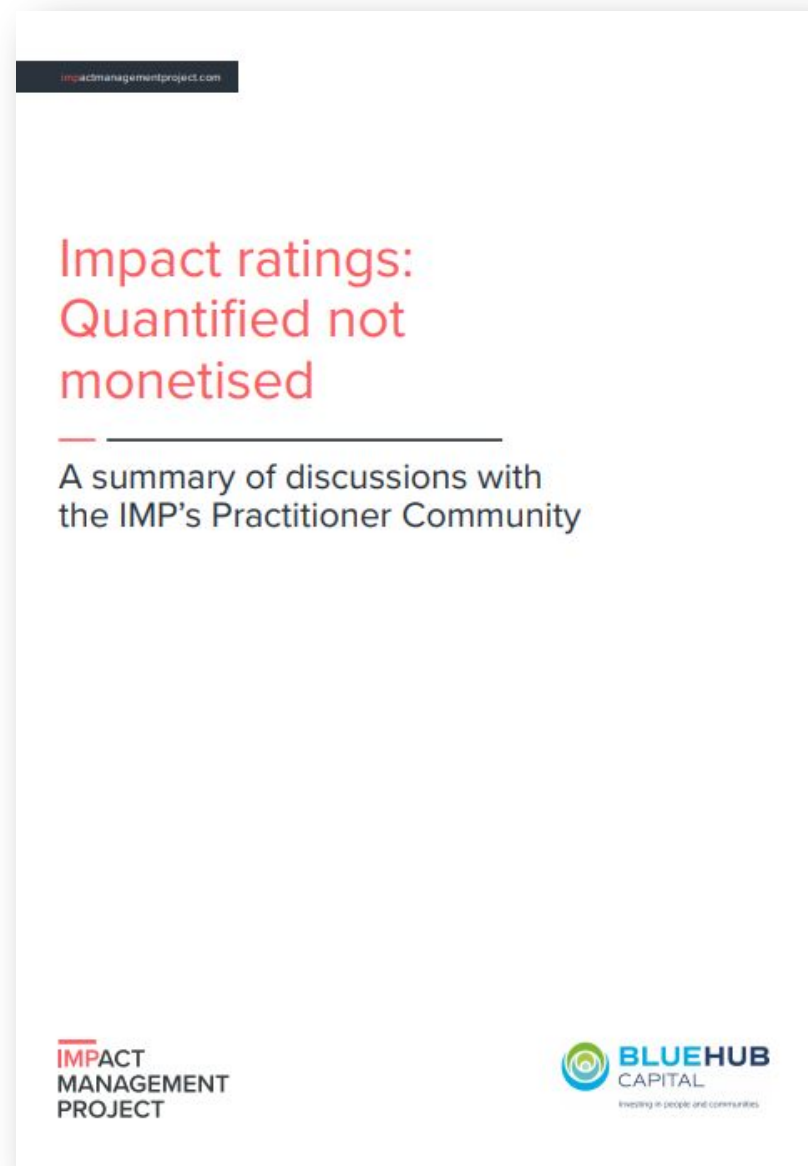
2020年7月

原祥子 抄訳・まとめ

「インパクト・マネジメントにおいて何が標準化できて、何が標準化できないのか？」

2019年、IMPは、オンライン(Harvard Business Review Idea Lab)でのインパクト・マネジメント実践者コミュニティ、Managing Impactを立ち上げ、インパクト・マネジメントの3つのキートピックに関するディスカッション・フォーラムをはじめた。本冊子発行現在、コミュニティのメンバーは330人を数える。この冊子は、そこで繰り広げられた「インパクト・レーティング」の議論をまとめたもの。あとの2つは「インパクト・マネジメントにおける標準化」と「インパクトの貨幣価値換算」。

この冊子にまとめられたものは、議題に関する最終結論ではなく、実践者コミュニティとしての現在地を示したもの。議論参加者は、アンケートにも回答し、回答数は58。議論はチャタムハウスルールにより、発言者が誰かはわからないようにしている。



1.インパクト・レーティングとは？

インパクト・レーティング：

インパクトの価値づけ(企業が人々、環境、経済に与える影響の価値や有益性を評価するプロセス)の手法の一つ。貨幣価値換算ではなく、インパクトにおける価値をベースを、定量的に格付けする。

通常、異種のインパクト測定方法の加重和であり、以下の順に実施される。

1. 事業を評価するための要素を選出する
(事業ごとに格付けのアプローチは異なり、複数の要素を用いることもある。)

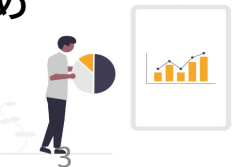
2. 各要素ごとに、データソースやメトリックス(ものさし)を設定し、正/負インパクトの大きさを選別する

3. 各要素ごとに、全インパクトの格付けを計算し、ウエイトを割り当てる

【POINT】

・現状では、各要素のウエイト割り当ての際、個人の投資家の価値観や投資団体のターゲット社会課題が反映されてしまっているが、ステークホルダーの経験に紐づく価値観やパフォーマンスも十分に反映されるべきである。

一方、ステークホルダーの巻き込みは、複雑さを生み出す可能性があるので注意。
(関わりたいステークホルダーもいれば、そうでない人/団体もいる等。)



2.“良い”デザインのインパクト・レーティングとは？

インパクト・レーティングが、“上手く”デザインされていれば、異種で多次元的なインパクトを、簡易的・効果的に評価できる。逆に、“下手に”デザインされたインパクト・レーティング（測定不能な指標が盛り込まれている、判断基準が不明確なガイドラインである等）を使用すると、誤った情報を伝えることになり、不明瞭なクライテリアに基づいて投資の意思決定が行われてしまう危険性がある。

【良いインパクト・レーティングの特徴】

包括性

多次元的で、正/負両方のインパクトを包括しているか。

目標

測定可能な方法によって算出可能な指標のみで構成されているか。

透明性

データソース、仮説、計算、算出方法を公表し、基礎となったデータの正確性について第三者が意見できる状態であり、評価者間信頼性*があるか。

「誤った精度」が発生する リスクを考慮

インパクト・レーティングを算出したデータの限界性を認識し、そのことを心にとどめて意思決定やインパクトについて議論できるか。

ステークホルダーの 内包化

インパクト・レーティングをデザインする際に、出来るだけ多くのステークホルダーに参加してもらい、多様な価値観を反映させているか。

実践に基づく改善

正確にインパクト評価できる上手なデザインを追求するために、絶え間なく評価アプローチを磨き続け、投資先からフィードバックを集めているか。

*評価者間信頼性・スコアガイドラインが明確であり、異なる評定者が、同じインプットデータから産出されたデータで、同じ評価結果に行きつくことが明らかであること。

2.インパクト・レーティング活用のメリット

“良い”デザインのインパクト・レーティングを活用するとき、企業や投資家は以下3点のメリットを享受できる。

①共通単位に訳すことで、パフォーマンスの把握・追跡・分析する際、多面的なインパクトを総合的かつシンプルに捉えられる。

- ・インパクト・レーティングは、投資家が異なる投資を扱う際に一貫性を作るための、多様なポートフォリオを提供できる。

②投資家のインパクト目標を明確化し、意思決定に際しての指針を示すことができる。

その結果、投資家が一番インパクトを生むと予想される投資に、効果的に資金を投入できる。

- ・投資家は、インパクト・レーティングによって、彼らが思いつかないような深い考察を導くことができる定量的質問を活用でき、事業がもたらすインパクトの重要な定量的側面について気づくことができる。

③複雑な情報を、簡潔で透明性高く共有できる。

その結果、チームやステークホルダー間で情報の整理がスムーズになる。また、資金提供者や他投資家と円滑にコミュニケーションできるようになり、インパクト評価結果の信頼性・透明性を高めることができる。

- ・インパクト・レーティングは単なる分析手法というより、むしろ団体の選択肢や価値観を表現する方法として捉えるべきである。

3.インパクト・レーティング活用のリスク・デメリット

逆に、インパクト・レーティングを活用するリスクやデメリットは以下である。

①インパクト・レーティング実践の標準化ができていない。

- 評価作成者・ステークホルダーにとっても、「測定方法が十分に厳格かどうか」、「評価結果の正確性が信頼できるか」に関わる基準は未整備であり、実践を通じた標準化が重要である。

②インパクト・レーティングは、間違った予想を導く可能性がある。

- 多くの投資家は評価後をフォローできないため、インパクト・レーティングの評価結果や予測が正確であったのかどうか分からない。そのため、実際に起こらない正/負のインパクトが、誤って評価結果に含まれてしまう可能性がある。

③投資家が自身の投資先企業のインパクトを過大評価してしまう。

- 投資家や企業が、データや方法論、選出のバイアスがどのように結果に反映されるか深く考えることなく、自分に都合よく投資家や投資先を格付けしてしまうことで、評価結果に悪影響を与える。

④個々の指標や多次元のインパクトにおいて、何が“良い”パフォーマンスの構成要素となるのか判断しにくい。

- インパクトは多面的な要素を含んでおり、各要素ごとに独立した・関連性のない情報をベースに評価しているため、何が“良い”パフォーマンスなのか一律的に分析しにくい。

⑤投資の「行き過ぎ」が起きる。

- 投資家は、彼らが人々や環境に会社が与える影響が過度になりすぎないように、用心深くあるべきである。善意がある投資家は、よりよい社会を作るという彼らの価値観と一致する社会的意義のある投資を奨励するが、行き過ぎた投資は、ビジネスを発展させた経験をもつ企業やステークホルダーに悪影響を与えるものでもある。投資家は、たとえ投資家の目標がプロジェクトや企業の過去の成績や将来ビジョンに一致していたとしても、投資を制限して謙虚に行動する必要がある。同時に、投資家はビジネスやプロジェクトを成功させるために、企業やステークホルダーが持つ知見や経験を尊重する必要がある。

4.実践例

代表的な、インパクト・レーティングを紹介する。企業や投資家/団体が自分自身で使うためにデザインしたものや、第三者によって提供されたものなどがある。

[一般的にアクセスできる投資家/団体によるインパクト・レーティング]

- ・[Actis Impact Score](#) : インパクトスコアの実践的な使用例はAnnex (p.15~) を参照
- ・[IDB Invest's Delta tool](#)
- ・[IFC's Anticipated Impact Measurement and Monitoring system](#)
- ・[Root Capital's Expected Impact Rating](#)
- ・[Impact-Financial Integration: A Handbook for Investors](#) : 8名の投資家による活用事例はAppendix 4 (p.62)参照
*様々なインパクトを定量的にプロファイルしたインパクト・スコアカードを発展させた[Partners Group](#)や、組織目標や優先順位を反映して作成された[BlueHub Capital](#) も代表例である。

[第三者機関によるインパクト・レーティング]

- ・[B Lab](#)
- ・[Impak Finance](#)
- ・[Sustainalytics](#)
- ・[World Benchmarking Alliance](#)

【おすすめのリソース】

- ・[Creating Impact \(IFC\)](#) : インパクト・レーティングの紹介とインパクト貨幣価値換算等の方法はsection2と3(p.40-54)を参照
- ・[Impact Due Diligence Guide \(Pacific Community Ventures\)](#) : 投資家によるアプローチの発展、実践のプロセスを1つ1つ紹介
- ・[Impact-Financial Integration: A Handbook for Investors](#) : 投資家のためのインパクト・レーティング作成のガイドラインを紹介

ご利用条件

本資料は一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ(Social Impact Management Initiative: SIMI) (以下「当法人」といいます)が運営するIMIグローバルリソースセンター(以下「本ウェブサイト」といいます)に掲載されているものです。

本ウェブサイトを利用される前に以下の利用条件をお読みいただき、これらの条件にご同意された場合のみご利用ください。本ウェブサイトをご利用されることにより、以下の条件にご同意されたものとみなします。

なお、以下の条件は、予告なしに変更されることがあります。本条件が変更された場合、変更後の利用条件に従っていただきます。あらかじめご了承ください。

1. 著作権について

本ウェブサイト上のすべてのコンテンツに関する著作権は、特段の表示のない限り当法人および当該資料の原著の作者に帰属しております。そのすべてまたは一部を、法律にて定められる私的使用等の範囲を超えて、無断で複製、転用、改変、公衆送信、販売などの行為を行うことはできません。

2. 免責事項

本ウェブサイトは、社会的インパクト・マネジメントに関連する海外の文献や資料を、日本語に訳しまとめたものを、著者及び出版元の許可を得て掲載しています。本ウェブサイトに掲載されているコンテンツは、あくまでも便宜的なものとして利用し、適宜、英語の原文を参照していただくよう、お願いいたします。

誤りのないようあらゆる努力をしておりますが、誤訳、あるいは、掲載されている情報の使用に起因して生じる結果に対して、当法人関係者及び当ウェブサイトは、一切の責任を負わないものといたします。

当法人は、予告なしに、本ウェブサイトの運営を中断または中止、掲載内容を修正、変更、削除する場合がありますが、それらによって生じるいかなる損害についても一切責任を負いません。また本ウェブサイトのご利用によりご使用者様または第三者のハードウェアおよびソフトウェア上に生じた事故、データの毀損・滅失等の損害について一切責任を負いません。

3. リンクについて

営利、非営利、イントラネットを問わず、本ウェブサイトへのリンクは自由ですが、公序良俗に反するサイトなど、当社の信用、品位を損なうサイトからのリンクはお断りします。また事前事後にかかわらず、その他の理由によりリンクをお断りする場合があります。

4. 資料の引用について

本ウェブサイト上に掲載された日本語まとめ、抄訳及び翻訳資料を引用する際には、出典の著作者名として「一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ(SIMI)グローバルリソースセンター」及び当該資料の原著の著作者名を、併せて明記ください。なお、引用の範囲を超えられる場合は、当法人および当該資料の原著の著作者者に了解を得てください。